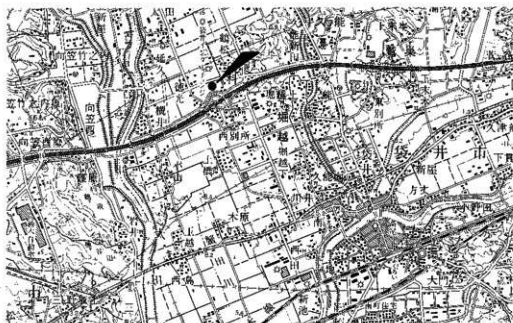


つる 鶴 まつ 松 遺 跡

日本電信電話公社山科無線通信所
建設に伴う緊急発掘調査概報



1 9 8 2

袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、昭和57年2月22日～3月30日に実施した静岡県袋井市小山宇古深田387-1番地他に所在する鶴松遺跡の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、日本電信電話公社の委託をうけて袋井市教育委員会が調査主体となって実施した。
3. 発掘調査は、永井義博（袋井市教育委員会）が調査を遂行した。
調査及び遺物整理には、荒生健志・松井一明・高野由美子他多数の諸君の協力を得た。
4. 本概報の執筆は永井が行った。
5. 発掘調査の資料は多量で現在整理中である。今後の資料整理をまって昭和57年度に報告書を刊行する予定である。

調査参加者

〔豊沢地区〕

浅井征江、鈴木咲子、寺田せつ子、寺田秀子、仲根世始子、名倉保子、早川はま

〔山科地区〕

久野すみ、棚原コガネ、永井八枝子、永田きみ子

〔学生〕

大場公彦、磯部裕二、浅井直子、松江敏子

調査協力者

吉岡仲夫、西井幸雄、早川保子、鈴木敏則、佐藤由紀男

I はじめに

鶴松遺跡は、袋井市小山宇古深田 387-1 他に所在する弥生時代中期から後期にかけて営まれた集落址である。遺跡範囲は太田川東側の微高地上に広がり、北より鶴田遺跡・鶴松遺跡・徳光遺跡・土橋遺跡、とつづく大集落の一部と考えられる。この附近は昭和47年に鶴松遺跡内で道路工事に伴う発掘調査が実施され、住居址・溝址等が大量の土器と共に検出されている。また東名高速道路袋井インターチェンジ建設に伴う徳光遺跡の発掘調査でも多量の遺物が出土している。この両地は、今回調査区の東側100m、南側200mにそれぞれあたる。その他周辺の用水工事や土木工事などでも土器や水田址の畦畔と考えられる矢板が発見されている。

日本電信電話公社より鶴松遺跡内に無線中継所建設計画の連絡を受けた袋井市教育委員会は、県教育委員会文化課、電々公社と十分な協議を重ねた結果、無線中継所用地内で事前に発掘調査及び範囲確認調査を実施することになった。調査方法は、耕作上をユンゴで掘削後、作業員により遺構を検出する方法をとった。グリット名称は、発掘順に第1グリット～第5グリットと名付け、特に中継柱建設部分（5G）、電力函建設部分（1G）に重点をおいて発掘した。また、発掘中に不明な遺構・遺物が出土した場合その必要部分を拡張しその性格解明に努めた。第3・4グリットについても必要に応じて、その疑問点解決のため拡張した。

実測及び写真撮影は、遺構検出後逐次行った。実測は電々公社用地西側境界杭を基準に1/20実測図を原図にし、微細図は1/10で作図した。写真撮影は中型カメラ（6×7）を中心に、小型カメラ（35mm）で補いながら撮影した。現地作業は激しい湧水に悩まされながらも2月22日～3月30日の間実施された。報告書は出土品整理作業終了後の昭和57年度末に刊行予定である。

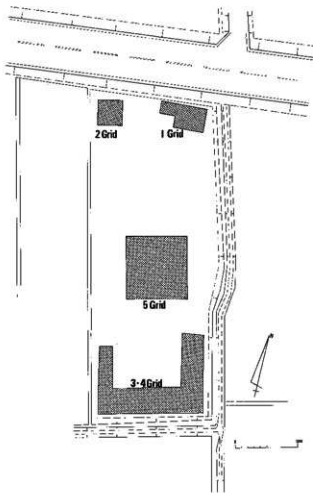


Fig. 2 調査区全体図

I 調査の結果（遺構）

鶴松遺跡は北から南へ徐々に下る微高地上にある。土層の堆積は次のとおりである。

第1層 褐色土（耕作土）

第2層 暗褐色土（水田床土）

第3層 灰色粘土（無遺物層）

第4層 青色砂質土（無遺物層）

この調査区内はいわゆる土器の包含層と呼べる層はなく、すべて這構の覆土内より遺物を出土する。ただし場所によっては、第2層と第3層の間に黒色ビート層が入る。第2層をユンボではぐと第3層上に Pit、溝址等が確認される。

第1グリット（1G）

第1層・第2層をユンボではぐと、地表下約30cmで第3層が現われ、東西に流れる溝址（M1）と土坑（D1）が確認された。

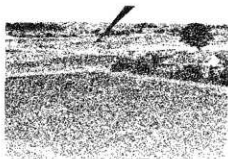
溝は確認部分で幅60cm、深さ30cm、現在長7mである。覆土上部は黒色粘土層、下部は黒色砂質土層である。遺物は土器が中心で覆土内に破片が散在している。

土坑は長軸1.4m、短軸80cm、深さ40cmの卵形でM1と切り合っている。土層堆積、遺物出土状態よりD1の方が折しいと考えられている。遺物は有機質のやや割れ黒色土内に多量に含まれている。台付甕片・壺胴部破片等が出土している。

第2グリット（2G）

1G同様に表上を掘削した段階で遺構が検出されている。2Gの北側に溝址（M2・M3）が重なるように検出されている。

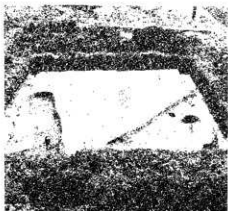
M2は北西から南東に流れている幅40cm、深さ10cm、確認長2.4mの小溝である。北側の未確



PL 1 鶴松遺跡全景



PL 2 第1グリット



PL 3 第2グリット

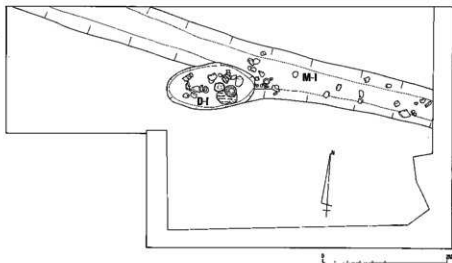


Fig. 3 第1グリット平面図

部部分でM3と重複している。出土遺物は若干数の弥生式土器片である。

M3はM2と重複しながら、北東より南西に流れている幅40cm、深さ10cm、確認長2.6mの小溝である。若干の弥生式土器片を出上する浅い溝である。



PL 4 D1 遺物出土状態

第3・4グリット拡張区(3・4G)

3G・4Gは4m×4mのグリットで計画されたが、重機で耕作土を掘削中、ほぼ完形に近い弥生式土器(高坏・甕等)を多量に見出したため、ただちに中止し確認面の精査を急いだ。周辺の土層・遺物の出土状態を検討した結果、大きな溝状遺構の中央部らしいと思われたため、急きょ3・4Gを拡張した。拡張区はほぼ全面に住居址・溝状遺構・Pitの覆土が複雑に重複し合い、まっ黒な土のあちこちから弥生式土器片が見られた。精査の結果、溝址5、住居址2、土坑3、柱穴と考えられるPit若干数を検出した。なお、拡張区の東西に排水用の集水升を設けた。

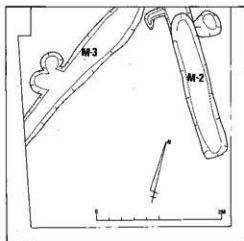


Fig. 4 第2グリット平面図

M5は3・4Gの北西部をかすめるように検出されている。土層堆積は、第I層＝黑色ピート、第II層＝黑色土、第III層＝黒褐色土の順で各層とも多量の弥生式土器を包含している。

M6は3・4Gの東側で検出された幅1.2m、深さ60cm、確認長9mの溝址である。M6は、M7と重複しているが、土層観察・遺物出土状況より見て時期的にはほぼ同じと考えられる。本拡張区内が北より流れてきたM6とM7の分岐点となっているのであろう。M7は検出面の北と南では若干様子が異なっている。北側は幅1.6m、70cmのU字形を呈して段差を持ちながら南へ流れてくる。そして途中より溝底部の一部が深さ約20cmほどさらに深くなり、いわゆる二段掘りになってくる。M7の覆土は、I層（上面）＝黑色ピート、I層（下面）完形土器を多量に含む黑色粘土、II層＝暗青灰色粘土、III層＝青灰色粘土、IV層＝砂質青灰色粘土となっているが、溝内の土層堆積の常で部分的に異なった土が混入している。M7の出土遺物は弥生式土器の他にIV層中でモモの種8点、木製品が、III層中からはコバルトブルーのガラス小玉が見つかっている。石器としても石斧片、たたき石片等が出土している。

M8はM6・M7の埋没後の落ち込みと考えている。この概観では一応溝址として取り扱っておくが、池状遺構、不定形の大形落ち込みの一部とも思われる。M8の覆土はM6・M7のI層として流入している黑色ピートがほとんどで、溝底部に若干の黑色土を残すのみである。土器の出土量はかなりあるが、M6・M7と異なりほとんどが細片ばかりである。

M9は3・4Gの南西隅で検出されている。しかし、溝のほとんどを西側集水升で削り取られておりその規模・性格を明らかにすることは不可能である。

5本の溝址は、M6・M7・M8と3本が集中している他は、M5とM6はほぼ平行関係に、M9とM5・6は直交関係にある。3本ないしは4本の溝が囲む一角があると考えるには、やや資料不足であろうか。



PL 5 第3・4グリット拡張区遺物出土状態

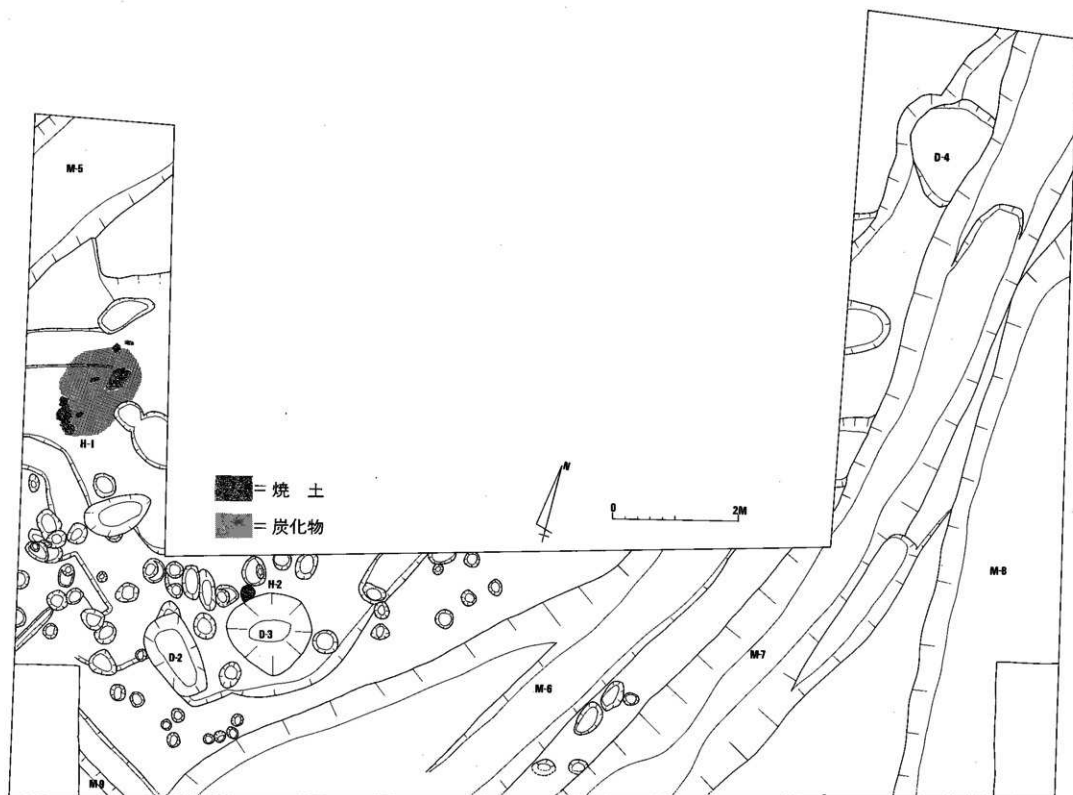
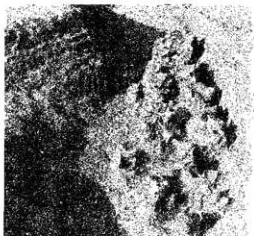


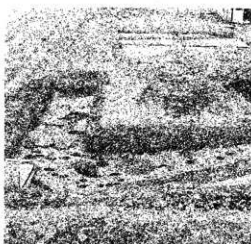
Fig. 5 第3・4グリット平面図



PL 6 M6 I 層遺物出土状態



PL 7 M6 II 層遺物出土状態



PL 8 第3・4グリット拡張区〈西〉

住居址 (H1・H2) は共にその一部が発掘区の中に現われているので正確な規模はつかめていない。壁の立ち上りも水田耕作によりほとんど失われており住居址の床面と Pit (柱穴) の一部が検出されている。

H1 は壁のわずかな立ち上りと床面の焼土炭化物と径40cm、深さ10cmの Pit が確認されている。

H2 は2つの土壌 (D2・D3) と切り合っており確認面でそのほとんどを失っている。D3 北側にわずかな焼土と正式な規格に合わない多数の Pit 群が床面で検出されている。柱穴と考えられる Pit は2つで径40cm、深さ38cm、径40cm、深さ40cmの数値をもつ。

H1, H2の2軒の住居址はプランやセクションで正確に分けられないため拡張関係にある可能性もある。

D2 は長軸1.4m、短軸80cm、深さ70cmの大型の上墳である。覆土は黒色粘土の単層で若干の弥生式土器片を含む。

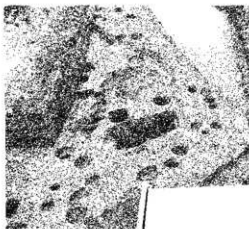
D3 は径1.2mの浅い皿状の土墳である。覆土は黒褐色粘土で完形になる弥生式土器片を含む。D1 は住居址とはほぼ同じ、D2 は住



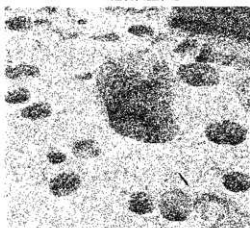
PL 9 第3・4グリット拡張区〈東〉



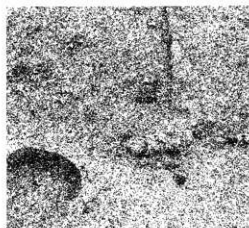
PL 10 M5 遺物出土状態



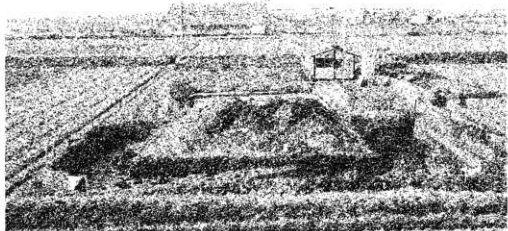
PL 11 住居址・土竈（西より）



PL 12 D2 南より



PL 13 住居址内焼土



PL 14 完了写真

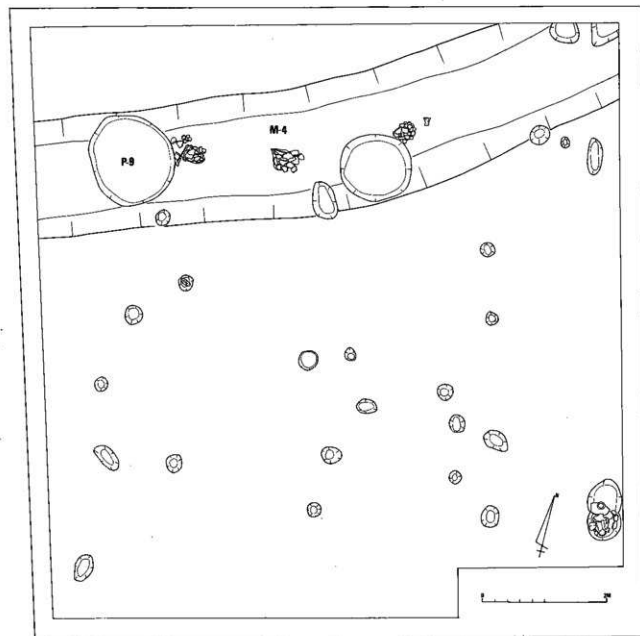


Fig. 6 第5グリット平面図

居址より新しい時期と考えられる。

第5グリット (5G)

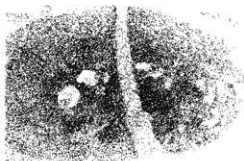
他グリット同様、重機で表土を掘削したところで Pit 群と溝址 (M4) が検出された。M4 は覆土の最上層より完形土器が見えたので重機による掘削を中止し、作業員により排土を行った。

M4 は 5G の中を東西に横切る幅 2m、深さ 80cm の溝址である。溝内は I 層から III 層に分けられ、遺物も層位ごとにとらえられている。溝底部は砂レキ層で湧水が激しく晴天につきでも水がいっぱいになっている。

Pit 群は 2 つの大型 Pit とその他の一群に分けられる。共に M4 埋没後に掘られたものと考えられる。大型 Pit は径 1.4m、深さ 30cm、径 1.2m、深さ 20cm の数値である。Pit 群は、合計 25 の小 Pit で大きく分けて 2 群に分けられる。現状は耕作で掘削されてははっきりしないが Pit の並び方から住居址の柱穴とも考えられる。



PL 15 第5グリット全景



PL 16 Pit 内遺物出土状態



PL 17 M4 全景 (東より)



PL 18 遺物出土状態

Ⅲ 調査の結果（遺物）

- ・土器…かなり良好な資料がテンバコ約50箱出土。溝内のⅠ～Ⅲ層では高坏・壺・甕等がセットでとらえられる。ミニチュア土器も若干含まれる。
 - ・石器…石片・たたき石片・その他不明石器若干数。
 - ・木器…低湿地のわりに少ない。杭など中心。その他用途不明木器若干数。
 - ・骨片？…D2より出土。1cm大で灰白色。骨の可能性もある。
 - ・玉類…コバルトブルーのガラス小玉。溝7の北端で出土。一部欠損
- その他溝7ではモモの種等も出土している。

Ⅳ まとめにかえて

出土品、図面・写真等はすべて整理がはじまったばかりである。そのため本書は遺跡の概要を紹介するにとどまった。今回の調査では、昭和47年調査の鶴松遺跡と昭和42年調査の徳光遺跡の結果の互の延長線上の交点にあたと考えられる。遺物も概観したところで、弥生中期末から後期にかけての太田川流域遺跡群の性格を踏襲している。なお、遺構内出土遺物で型式決定に参考になる資料があるが、詳しくは本報告で述べたい。

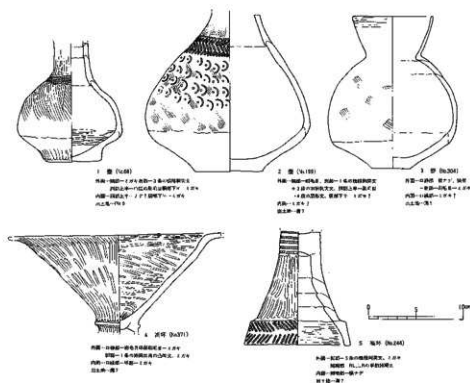


Fig. 8 出土遺物実測図 (1/4)



PL 19 溝4出土 (No. 105)



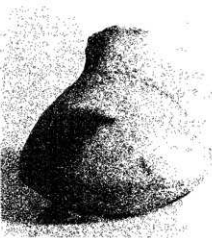
PL 20 溝5出土 (No. 304)



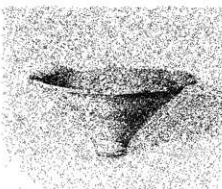
PL 21 溝7第Ⅰ層出土 (No. 199)



PL 22 溝7出土 (No. 372)



PL 23 溝7第Ⅲ層出土 (No. 367)



PL 24 溝7第Ⅰ層出土 (No. 371)

鶴 松 造 跡

日本電信電話公社山科無線通信所
建設に伴う緊急発掘調査概報

昭和57年3月31日 発行

発行 袋井市教育委員会

印刷 株式会社 開 明 堂